

感情形容詞構文小考：「うれし」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1995-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1468

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



感情形容詞構文小考

——「うれし」について——

吉 田 光 浩

はじめに

感情形容詞述語文には、感情主体や感情の機縁を表現する句など、感情表現にとって必要な幾つかの要素があらわれる。しかしながらこの至極当然のようにみえる現象について、記述することは、容易ではない。ここでは、前稿「感情形容詞述語の関係成分について——『源氏物語』にみられるうれしの場合——」^(注1)(以下、前稿)において考察した形容詞「うれし」の關係諸要素について、中古和文の表現の展開に沿って感情の成立に至る過程を推定しつつ、その要素間の相互關係をできるかぎり統一的に考察することを目的とする。^(注2)ここで「うれし」を特に取り挙げるのは、この語が中古形容詞の中でも、語形・語義の面において安定度が高く、もっとも感情形容詞らしい点を備えていると考えられるからである。従来この語彙研究・語史研究においては、専ら、史的・資料的な面において変化に富む語が考察の対象として取り挙げられる傾向が強く、「うれし」のように変化に乏しい語については看過されてきたように思われる。しかしながら、感情形容詞としてもっとも典型に近く、安定的な「うれし」のような語は、プロトタイプ論の立場からは、最も重視される要件を満たしているものと考えられるのである。

なお、本稿の考察の対象は、以下の中古和文資料であるが、引用箇所表記については適宜、改めたところがある。

阪倉篤義・大津有一・築島裕・阿部俊子・今井源衛校注『日本古典文学大系竹取物語・伊勢物語・大和物語』（岩波書店）
 日本大学文理学部国文学研究室編『土佐日記総索引』（日本大学人文科学研究所）

曾田文雄編『平中物語総索引』（初音書房）

松尾聡・寺本直彦校注『日本古典文学大系落窪物語・堤中納言物語』（岩波書店）

松村博嗣編『枕草子総索引』（右文書院）

佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引』（風間書房）

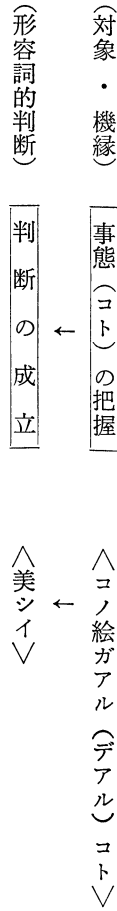
阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注『日本古典文学全集源氏物語』（小学館）

感情形容詞述語文の構造とその認識過程

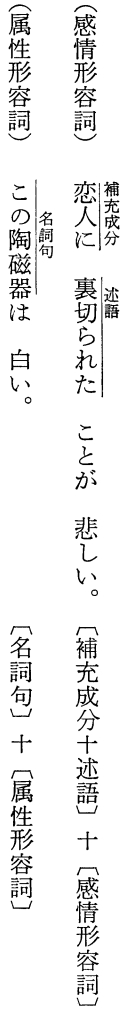
形容詞文にみられる感情・感覚・評価・属性^(注3)といった形容詞カテゴリー間の文構造上の相連とその認識過程との対応関係については、川端善明氏の形容詞文に関する一連の論稿に詳しく記されている^(注4)。本節の以下の部分については、これらの論稿に負うところがきわめて大きいのであるが、ここでは、本稿の目的に即して以下の考察を試みておく。

形容詞が表現される場合に成立する判断のことを、ここでは仮に形容詞的判断と呼んでおく。形容詞的判断が成立する場合には、そのような判断を誘発させるところの対象（感情の場合は機縁と呼ぶ方が適当であろう）を、前提としてもつことが普通であり、そのような対象あるいは機縁となるものは「モノ」ではなく「コト（事態）」であることが知られている^(注5)。例えば、「この絵は美しい」において、「美しい」と判断されているのは、表現上「この絵」であるが、そこに

は、△コノ絵ガアルコト▽あるいは△コノ絵デアアルコト▽といった事態が前提として存在しているものと考えられる。



しかしながら、対象・機縁となる事態部分が言語の表層に浮び上がってくる場合にどのような表現形式を取るかということについては、形容詞のタイプにより異なりがあり、また、それが使用された文脈あるいは場面においても異なりが生ずる。例えば、次の例のように、感情形容詞の場合では、機縁が表現される際に事態部分が「主語(主格)に代表される補充成分十述部」のような句の形式で表現される傾向が強いのであるが、それと対極的に語られることの多い属性形容詞の場合には、語の形式、すなわち「名詞句」で表現されることが普通である。



属性形容詞の場合には、事態がコトであることに対応する名詞句の述語部分として「ガアル」あるいは「デアアル」などが想定されるのであるが、それが単文のうちに表現されることはない。このため、言語の表層面についてのみ捉えるなら

ば、感情形容詞は、その感情を誘発する機縁（対象）がコトの形式（述語句）で示されることが多くなり、一方属性形容詞の場合にはモノ形式（名詞句）で示されることが多くなるのである。^{（注7）}

このような形容詞カテゴリー間にみられる構文的な表現形式の異なりは、語彙論的にも統語論的にも、今後の研究にとって重要な示唆を与えてくれるものであろう。しかしながら、構文研究の対象として中古和文体の文章を選ぶときには、資料的な制約もさることながら、句と句の繋がりがきわめて緩やかで、相互の関係を規定し難いという文体的な理由もあって、きわめて困難な作業が予想される。本稿においても、このような問題は、解消しえたわけではないのであるが、典型的な例について感情の成立に注目しながら（上記のような認識過程を推定しながら）表現の展開を読み取ってゆくならば、ある程度の傾向のようなものは、指摘が可能なのではないかと思われるのである。したがって、ここでいう「構文」とは、感情形容詞の側から見た定型化の可能性が考えられる表現形式という程度のものであり、本稿は、それについてのひとつの試論として、ひとまず位置付けておきたい。

また、認識と一口に言っても中古和文の場合には、作中人物・語り手・作者・書写者・読み手といった主体が考えられ、そのうちの誰の認識であるかということも明らかにされるべき問題ではあるが、ここでは、感情の成立過程を辿るという本稿の手法に沿って、読み手が、文章表現から理解し得る感情主体（主に作中人物や語り手などがこれに該当する）の認識ということに留めておく。

以上のように、さらに、考察すべき点はおおいに残されているのであるが、ここでは、ひとまず上記のような、きわめて概括的な理解にしたがっておくことにする。

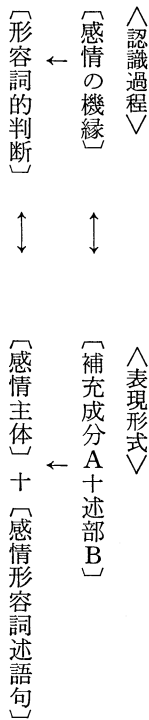
なお、和文体資料における構文研究では、次例 a にみられる「はさみこみ」などの挿入句は、きわめて興味深い対象であるが、本稿では感情形容詞述語句についての関係要素について記述するという立場から、形容詞述語句と関係をもた

いこのような要素については扱わないことにする。これらについては、新たな方途で記述する必要がある。

a 　むかし、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけん、「さらば、明日物越しにても」といへりけるを、限りなくうれしく、
（伊勢物語・九十段）

感情成立に至る認識過程と表現形式との基本的関係について

さて、前節において述べたように、感情形容詞文では、感情の機縁部分としての「事態（コト）」が表現上に現れたものをいわゆる一種の成分（関係要素）としてもつことになる。これが、「補充成分A（述部の主語を含む）」とその補充成分を承ける「述部B」とからなる部分を構成する。また、そのような感情の機縁を承けた形容詞的判断は、それが反映された表現形式である「感情形容詞述語句」と同時に、「感情主体」（話し手が現在の言い切り断定表現をなす場合は一人称の主語）に対応する。したがって、そのような認識過程と言語表現上に現れた表現形式との関係については、ひとまず、次のようにその骨格部分を想定することが可能であろう。



このうち「補充成分A」については、例えば「述部B」が動詞述語句ならば格成分として複数の項がみられることになる。この場合の「補充成分A十述部B」、あるいはその一部に該当する表現部分が、おおむね前稿において考察した「感

情誘発句^(注8)(ここでは、単に「誘発句」と呼んでおく)にあたるものである。それに「感情主体」と「感情形容詞述語句」を加えて表現形式上三つの項が特定できる。以下の例文においてそのいずれかを欠くものは、既に前文のどこかにその要素が組み込まれている場合や、あるいはそれとは特定できないけれども文脈全体に溶け込んでいる場合などが想定される。

* 「感情形容詞述語句」については、形容詞が述定に与る例をのみ考察の対象として扱うことが本来であるが、そのような例自体が、(属性形容詞よりは多いものの) 僅少であるため、ここでは、「うれし」が「おもふ・おぼす・みる」など思考判断を表す動詞や存在詞に続く場合、また、中止法などにたつ場合も含めて、述語句全体を「形容詞述語句」として捉えてゆくことにする。

〔補充成分A十述部B〕十「感情形容詞述語句」

b 京に いりたちて うれし。

(土佐日記)

〔補充成分A〕十「感情形容詞述語句」

c 「院の御消息の いとうれしく侍りて、かく色ゆるされて侍ること」などきこえ給ふ。(大和物語・九八段)

〔感情主体〕十「感情形容詞述語句」

d 誰も誰も いとうれし。

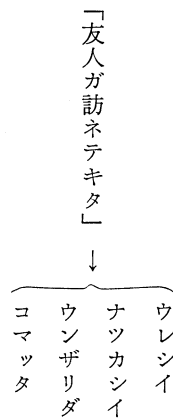
(落窪物語・卷二)

感情の機縁と誘発句・状況説明句について

(感情の機縁)と(形容詞的判断)との相関という認識のレベルのありかたが表現形式に現れたものとしては、基本的にはこれで必要最低限のものを満たしているのであるが、現実の表現の展開に即して述べるならば、感情形容詞文の関係要素については、今少し詳細な分析を加えることが可能であり、また、そこには、感情形容詞特有の要素をみることがで

きそうである。

例えば、ある感情主体が「補充成分A十述部B」という表現形式によって表される事態（対象・機縁）に遭遇した場合に生ずる感情（形容詞的判断）は、一見、必ずしも一定であるとは限らないように思われる。この点において感情形容詞は、属性形容詞などのように客観性・恒常性が高い判断について用いられる形容詞の場合とは大きく異なっている。このことについては前稿において少し説明を加えたが、次の例を用いてさらに補っておく。



例のように「友人が訪ねてきた」という「補充成分A十述部B」（誘発句）によって表される事態に対する感情としては、様々なものが想定される。「ウレシイ」「ナツカシイ」などは、この場合、きわめて自然な感情と解されるが、その友人がいつも感情主体を煩わすような存在である場合には「ウンザリダ」や、忙しくて談笑の時間をさくことができない時には「コマッタ」のような感情が誘発されることもあろう。すなわち、「補充成分A十述部B」で表されるような事態に対応する感情は、実に様々なものが想定されて、ひとつに絞り込むことが難しい。

このことは、次のように説明されるであろう。すなわち、感情の機縁となる「事態」は、前節において考察した基本形式に見られるような、単一の「補充成分A十述部B」によって表される場合ばかりではない。むしろ「事態」のなかには、表現形式上、複数の「補充成分十述部」によって表し分けられるもの（あるいはそのようにしか表し得ないもの）が溶け込んでおり、そのうち感情成立にとって直接の契機となるものが「補充成分A十述部B」を中核にもつ述語句（誘発

句)として表現上に浮び上がってくるものと捉えるべきであろう(それゆえ「誘発句」も実際には幾つかの述語句の連鎖として表現されることが多い)。そして直接の契機には含まれないが、その背景(あるいは事情)として存在する前提的な状況を説明するものとして、更なる述語句の連鎖が必要となることもある。したがって、多くの場合には事態の中核部分のみを表現する「補充成分A十述部B」だけでは、事態の全貌を描くことができず、その結果、表面上は事態が特定の感情に直接結びつかないようにみえる場合が生ずるのである。この場合の前提的状況を説明する述語句の連鎖が、前稿において立項した「状況説明句」に該当する。もちろん、事態の全体を描き切るには、膨大な表現を尽くす必要があり、例えそれが可能であったとしても人間の自然な感情体験は、形容詞述語文ひとつで表現可能なほど単純ではない。しかしながら、このような事態の前提的背景を説明する「状況説明句」は、ある程度の感情の特定に重要な役割を担っているものと考えられるのである。

e うれしきもの 日ころ、月ころ、しるき事ありて、なやみわたるが、おこたりぬるも
状況説明句 誘発句 形容詞述語句
 うれし。

(枕草子 二七六段)

f (花散里) 「つきつきしくうしろむ人(夕霧)なども、事多からで、つれづれにはべるを、うれしかるべきこと
状況説明句 形容詞述語句
 になむ」

(源氏物語 玉かづら)

g 例ならず人のささめきしけしきもあやし、とこの宮は思しつ寝たまへるに、かくて(姉君ガ)おはしたれば、
状況説明句 誘発句 形容詞述語句
 うれしくて、

(源氏物語 あげまき)

h 越前守、「おのづから此の族にはかばかしき人なくて、見つくる人に、『おもしろの駒はいかにいかに』と笑はるがはしたなきに、同じ殿ばらといへど、ただ今のおぼえたぐひなき人にいふに、縁因に成りぬるこそ、たのもしくうれしけれ」
状況説明句
感情発句
形容詞述語句
 (落窪物語・卷三)

ところが、「状況説明句」は、「誘発句」とは異なり、「感情形容詞述語句」と直接係り受け関係をもつ要素ではない。それは、あくまでも、感情の機縁の内部要素が表現上に現れたものであり、機縁を機縁たらしめる役割を果たす要素に過ぎないものである。それゆえ、その部分は、感情形容詞の關係要素として挙げない方がよいという立場も可能であろう。しかしながら、感情形容詞と対比的に捉え得る属性形容詞の場合には、このような要素が現れ難いという事情もあり、この要素は、形容詞カテゴリー間にみられる文構造の相違を考える手掛かりにもなるものであるので、ここでは間接的に感情形容詞と關係をもつ要素のひとつとして扱うことにする。

なお、「事態」の中核としてある「誘発句」と「事態」の前提としてある「状況説明句」とは、同じ事態の一部分が表現されたものであるが、その両者の区別は、必ずしも難しくはないようである。

i 衛門の尉、典業と見て、年比くやつにあはんと思ふに、うれしと思ふ。
感情主体
誘発句
状況説明句
形容詞述語句

(落窪物語・卷二)

例えば i の場合、感情の機縁である事態の中核が表現された「誘発句」は、感情成立に先立って成立する「典業と見て」であり、その前提的な状況把握が表現された「状況説明句」は「年比くやつにあはんと思ふに」であることは、比較的容易に察しがつくものと思われる。

より一層の考察が必要であるが、典型的なものについてのみ述べるならば、「誘発句」は、感情体験成立のための直接

の契機となるものであるがゆえに瞬間的（あるいは突然）に直面する事態を表すことが多いことに対して、「状況説明句」は、前提的にあるいは半恒常的に存在する状況や背景を描くものであるがゆえに、ある一定の時間的な幅をもつ（あるいはそのように解釈される）場合がみられ、表現形式上では、アスペクトの面において特色が見られるようである。また、句の接続形式については、多様なものが見られるのであるが、典型的には、「誘発句」は、活用語の準体法や接続助詞「バ」による条件法をとるものが、比較的多く見られ、一方、「状況説明句」については、例 f・g・h のように「ヲ・〜ニ」のような接続形式をとるものが、比較的多い。

形容詞的判断と感情内容句・感情主体・感情形容詞述語句について

ところで、このような「状況説明句」あるいは「誘発句」は、現実世界に生成する事態の描写として存在する。それゆえ、その事態は、典型的には感情主体以外の存在にも把握可能な、ある程度の客観性をもつものとして存在することが多いのであるが、それに対して、感情とは、きわめて個人的・主観的な体験であるといえる。このため、事態と感情との間には、論理の展開上、ある程度の落差が生ずる事になる。したがって、その落差を埋めるためにも、また、より緻密な表現を得るためにも、感情の機縁との遭遇から得られた感情体験を、一度、感情主体の内部において、ある程度、理性的・認識的に把握させておいて、その媒介を通じて、それとほぼ同時に感情が成立するという過程を経ることもあるものと推察される。前稿において「感情内容句」と呼んで考察したものは、この過程を反映したものとして捉えることができるであろう。

j 帯刀、おもしろの駒のことを妻に語りければ、下心には、いみじとねたかりし答（たふ）すばかりの身にもがな

誘発句

感情内容句

と思ひしるしにやと、
形容詞述語句
誘発句

(落窪物語・巻二)

k さやうのことりにやうりやうじかりけるが、
感情内容句「左の一はおのれいほむ。さ思ひ給へ」など頼むるに、さりとも
形容詞述語句わるきことはいひ出でじかすと、頼もしく
形容詞述語句うれしうて、
(枕草子 一四三段)

l よくぞかかる騒ぎもありけると、なごり頼もしう、うれしうおぼえたまふこと限りなし。
感情内容句
形容詞述語句

(源氏物語 あかし)

m (右近) 「容貌はいとかくめでたくきよげながら、田舎ひこちこちしうおはせましかば、いかに玉の暇ならま
感情内容句し。いで、あはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ」と、おとど(乳母殿ノ教育)をうれしく思ふ。
誘発句
形容詞述語句

(源氏物語 玉かつら)

n それをほのかに聞きて、
誘発句この男は、「それなるべし」と思ひて、「あやしくもありけるかな。ここにしもかうや
感情主体どりにけるよ」と思ふに、うれしくもあり、
形容詞述語句
感情内容句

(平中物語 三六段)

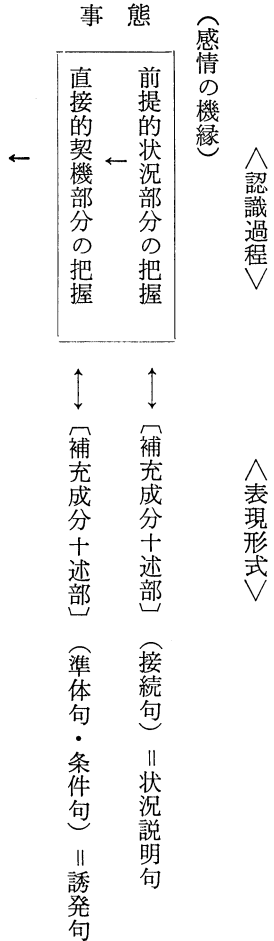
ここで注意したいのは、この関係要素が引用句(ゝト・ナド)の形式をとる傾向がみられることと、引用句の内部が詠嘆・疑問などのムードをとる傾向がみられることであろう。例nの場合のように「思ふに」が感情形容詞と引用句との間に介在している例も見られるものの、基本的には、j・k・l・mの例のように、引用句「ゝト」を形容詞述語句が承ける形と考えてよいようである。これらの例は、いずれも、あるひとつの事態に直面した主体の感情体験が、形容詞によ

ってすぐさま表現されるのではなく、それよりも幾分^(主9)理性的・認識的に把握され、表現上に現れた部分であると理解し得る。

もちろん、文脈上、機縁表現部から感情形容詞までの間に大きな落差が生じていない場合にも、この形式は現れているのであるが、それは、表現の緻密性を高めるために重要な役割を担っているものと考えられる。あるいは逆に、その落差を表現上の妙味として活用する場合には、このような部分が介在しないような例も多く見られる。

感情形容詞「うれし」の認識過程と表現形式について

以上、述べてきたところに従って、感情の機縁（事態）との遭遇から感情成立に至るまでの過程とそれに対応する表現形式との関係を図式化すると次のようになるものと考えられる。



(形容詞的判断)

機縁に対する認識的把握

↑↓〔感動・詠嘆・疑問表現〕 (引用句) || 感情内容句

←
機縁に対する感情的把握

↑↓〔感情主体〕 + 〔感情形容詞述語句〕

* 各表現形式の現れやすさおよび出現順序は文体あるいは文の種類(平叙・命令等)により異なる。(注10)

すなわち、(感情の機縁)となる事態は、前提的状況部分と直接的契機部分として把握され、その各々が表現形式上では〔状況説明句〕と〔誘発句〕に対応する。これらは、典型的な例では、前者が「くろ・くニ」のような接続句の形式をとる、後者は準体句や条件句のような形式をとることが多いようである。一方、その機縁を承けて成立する(形容詞的判断)は、認識的把握と感情的把握に分析される。前者に表現上対応する部分は、基本的に引用句の形式をとる〔感情内容句〕であり、後者に対応するものが名詞句の形式をとる〔感情主体〕と、〔感情形容詞述語句〕であるが、多くの場合は、前者の認識的把握の過程を経ないで、直接、感情的把握に至ることが多いようである。このことは、〔感情内容句〕が多くは現れないところから推測されるが、とりわけ感情形容詞にとって認識的把握の過程(引用句)の存在は、他のカテゴリーに属する形容詞群との相違を見分けるための重要なメルクマールとなるものと考えられる。

おわりに

古代語の認識過程などは、安易に扱うものではないとの批判を恐れず、敢えて単純化した様相のもとに感情形容詞述語文の構造について考えてみた。古代の感情体験なるものが、果たして文章構造上においてシステマティックに捉え得るか

という難題に光を見出だしたからであるが、結果的には、「うれし」一語に限っても、実に多様な表現形式が認められ、前途の多難が予想されるものの、一条の光明に辿り着く道を、わずかに見出だし得たように思われる。

なお、前稿においては、上記で考察した関係要素以外に、「〜心地ニ(モ)」という要素についても取り挙げたが、この要素については、感情主体の認識要素として扱うには問題があるため、検討の余地があると判断して、ここでは扱わなかった。この他に資料の文体による表現形式の相違などについても言及すべきであったが、すべて今後の検討課題として残されている。

(注1) 参考文献⑤参照

(注2) したがって、本稿において述べるものは、中古の和文資料にみられる「うれし」についての文の表現形式の考察であり、そこには、単に構文的な問題に留らず、中古和文がもつ文体的な問題もふくまれていることと推察される。

(注3) ここでいう感情形容詞は、参考文献②の情意性形容詞に、属性形容詞は状態性形容詞に、各々対応する。

(注4) 参考文献①、②参照

(注5) 参考文献①、②参照

(注6) あるいは「今朝、目がさめたら、なんとなくうれしかった」のように、表現上は、まったく機縁部を指摘し得ない場合もある。このような場合について、尾上圭介氏は、参考文献④において、『悲しい』『うっとうしい』などの感情は具体的な機縁がなくともそれこそ気分として、従って超状況的に且つ持続的に存在し得る」と説明される。

(注7) 参考文献②においては、感覚・評価、それぞれの形容詞の文構造と認識過程との関係についても詳述されており、情意性形容詞(ここでいう感情形容詞)と状態性形容詞(同、属性形容詞)の中間態として位置付けられているが、これらについては、本稿の目的上、省略にしたがうことにする。

(注8) ここでいう、「句」についても、厳密な定義が必要であるが、ここでは、「文のなかに組込まれた、文としての性格をもつ表現」という程度の定義に留めておく。

(注9) ここでの認識的把握という用語の当否については問題があろう。引用句の内部のムードには、詠嘆などがあり、いささか「認識」という用語にそぐわない点もあるからである。しかしながら、この把握は、少なくとも感情的な把握よりも分析的に感情体験を受け止める部分と考えられるため、ここでは、比較の問題として「認識」の用語にしたがうことにする。

(注10) 参考文献⑤参照

(参考文献)

- ① 川端善明「形容詞文」(『国語国文』二七―一二・一九五八・一二)
- ② 川端善明「用言」(『岩波講座日本語6 文法I』一九六七・岩波書店)
- ③ 西尾寅弥「形容詞性述語の史的展開」(『講座日本語学2 文法史』一九八二・明治書院)
- ④ 尾上圭介「感嘆文と希求・命令文―喚体・述体概念の有効性―」(『松村明教授古稀記念国語研究論集』一九八六・明治書院)
- ⑤ 吉田光浩「感情形容詞述語の関係成分について―『源氏物語』にみられる「うれし」の場合―」(『大妻国文』二五・一九九

四・三)